

## あめのまほう

龍郷町立円小学校 三年 青木 実李

「ねえお母さん。このあめわたしも食べてみたいなあ。おねがい、買って。」

「仕方ないな。一ふくろだけだよ。」

「わーい。やったあ。」

ずっとほしかったあめが手に入った。このあめは、かごしまにいる友だちにおみやげであげるために、買っていった。でもわたしは、一度も食べたことがなかった。だから、買ってもらえることになって、うれしかった。

いろいろなあまみの動物のイラストがかいてあるあめだった。クロウサギやハブ、アカシヨウビンにケムン。わたしはまずクロウサギのあめをなめていた。いちご味のあまいかおり。思っていたよりおいしい。そのしゅんかん、わたしは森の中にいた。わたしの家のうらにある森だった。

「なんで、ここにいるの。どういうじょうきよう。」  
びっくりして、なきたくなかった。

「家に帰らなくっちゃ。お母さあん。」  
でもぜったいにお母さんに聞こえるはずがない。だって、声が出ていない。大へんなことになった。

「よ、クロウサギさん。ぼくといっしょにあそばないかい。」

よこを見るとケナガネズミがいた。

「うそ。ネズミがわたしに声をかけてきた。わたしがクロウサギ？」

「あ、あのあめをなめたからだ。クロウサギのあめをなめたから、クロウサギにへん身したんだ。おもしろい。」

わたしは、楽しくなつてケナガネズミと遊ぶことにした。わたしがおにになった。道路のはんたいがわにケナガネズミがいるのに気がついた。

「あつ、見つけた。」

道路にとびだしたその時、左からすごいいきおいで車が来た。

「キヤーひかれる。」

気づいたら、家だった。妹が

「お姉ちゃん、だいじょうぶ。」

とふしぎそうな顔で聞いてきた。どうやらわたしはねていたみたい。

「ゆめだったんだ。でもおもしろかったな。」

次の日わたしは、アカシヨウビンのあめをなめてみた。するときのうみたいに、なぜか森にいた。森の木のとっぺんに。体を見ると全身が真っ赤。口をさわってみると

とがっている。手を広げると、バサバサと音がする。

「わたし、アカシヨウビンになったんだ。」

わたしが通っている小学校の前をとんでみた。水かけをしていた校長先生が、

「あ、アカシヨウビンがいる。」

とうれしそうに言っていた。本当はわたしなのに。うれしくなつて今どは公みん館に行つてみた。するとわたしの友だちが

「アカシヨウビンがとんでいる。」

と大声でさげんだ。わたしはもつとうれしくなつて、公みん館のやねにとまつて鳴いてみた。

「キヨロロー。」

みんながいつせいによつてきた。何回も何回も鳴いた。気づいたら、またわたしにもどつていた。その時わたしは気づいた。このあめのまほうは、一時間で切れちゃうんだ。

「ピンポーン。」

友だちが、あそびに来た。

「あのね、さつきね、公みん館にね、アカシヨウビンが来てね、たくさん鳴いたんだ。」

そのアカシヨウビンはわたし。よろこんでくれたんだ。そして、みんなであそんだ。

次の日の夜、八月おどりがあつた。しゅう落みんなで

ガジュマルの木のしたにあつまつて、おどる。わたしは、

「ハブになろう。」と心で思い、家族に先に行つてもらつて、あめをなめた。気づいたら、ナミチの横の石がきのすき間にいた。手があない。舌がのびる。せいこう。

ハブにへん身。ハブの気分を味わうために、ネズミをさがしに行つた。そのころ友だちが、わたしの家族に向つて

「おそいね。いつ来るの。」

と話しかけている声が聞こえた。お母さんは少し心ばいそうだったけど、お父さんは

「大じょうぶ。もう来るよ。」

するとわたしのまほうはとけていた。お父さんは

「ほらね。来たでしょ。」

「おまたせ。心ばいさせちゃつてごめんね。」

それからわたしは、みんなといつしよに八月おどりをおどつた。歌つたりチヂンをたたいたり、ジュースをのんだりして夜おそくまでおどつて楽しくすごした。

このあめのまほうは、わたしだけのひみつ。明日は、どのあめをなめようかな。もう一どクロウサギを食べて、ケナガネズミのかくれんぼのつづきをしようかな。わたしは、明日が楽しみになつてきた。

【評】奄美の動物のイラストが描かれた飴をなめると、ちよつとの時間だけ、クロウサギやアカシヨウビンに変身できるという素敵な発想のお話です。大好きな奄美の生き物たちになつてみたいという思いが伝わってきました。

(円小 教諭 鷺山 伊織)